國本を取立被成候義は、御勉強も不被成、唯頻りに益々瑣細の雜事に神魂を御飛し被成候ては、何そ御惑の甚しきや、彼の宮殿樓觀を廣大にし、車馬衣服を華にし、賈人の眼を眩曜して、其錢金を借出し、以て皮膚の醜瘡を覆ひ被成候事の如き者、是皆庸愚舊來の常躰而已、右樣の小技にて豈心腹之病を治療可屆候哉、能々御自省御熟察可被成候。

足下此書御一覽の上は、謾に狂妄の罪言を吐出候樣、思召可被成候得共、秋田之境內四十万人の內にて、足下に對して右樣の議論仕候者は、當今之世捨我而誰哉。かゝる非常の罪言を吐候者は、固より可斬者に候、足下大に赫怒を發し、先つ小生か頸を斬り、乃以て弊政を改革し、以て舊染之惡俗を一新し、以て秋田の封內を充實し、以て橫殺の赤子を救濟し、以て本藩の國勢を隆盛に御取立被成候はゝ、小生の死、勝二其生一や遠矣、故に自投二却己頸一、勇進而犯二嚴威一不レ得レ見二秋田之蕃昌一、則生亦樂乎、足下若し此百祐を御斬被成候も不能して、只安閑と御勤仕被成者に御座候はゝ、實に是俗に云聞則千兩、見則一兩の御家老也、小生亦遠く他邦に行て、再北望の念を絕ん而已。

後ち臺方村に移り、幽邃閑雅、山高く水淸きの孤村に、獨り管城子を友とし、居ること五年、文化十三年十二月に至り江戸に出つるや、神道方吉川源十郎講談所の學頭に擧けらる、偶ま講談所各地

に建設の議に付、同志間に紛擾を生し、遂に奉行所の吟味する所となり、事師家の難義に及ひ且門人其科を蒙るもの多きを以て、翁乃ち師家の危難を犯し門人の罪を蒙りて江戸を放逐せられ、下總國舟橋宿に轉し後ち深川に寓居し、天保三年十一月、子昇庵を江戸日本橋の宅に訪ふて父子相歡談すること二夜、偶ま幕吏の探偵する所となり、其罪に因りて江戸十里四方以外の地に放逐せらる、翁乃ち去りて武州足立郡鹿手袋村の草庵に韜晦す。翁東西に流離し南北に頓涉して備さに艱難辛苦を嘗むれとも、常に能く膏油を焚きて暑に櫱き、手に管を釋てず、老いて益々健なり。既にして翁の著書益々世に行はれ、翁か國家に盡すの赤心も世に顯はるゝに及んで、松平信濃守大に盡力して御赦を得んことを計りしか鳥居甲斐守容易に之を許さず、今當時の記錄を見るに、

卯七月十三日

信濃守殿御渡

鳥居甲斐守へ可尋趣

佐藤祐齋儀一人引拔御赦之儀は規則に拘はり候に付難相成候併海防其外御國益筋の儀相心得居候ものに付當地へ呼寄御藥園其外可然場所の內へ住居禁足申付相應の扶助米被下其筋より相尋候御用之外他人面會差留右之趣にも相成候ては如何可有之哉差支之有無取調可被申候尤書面之趣にて差支之

筋有之候はゞ當地にて住居の場所幷に扶助米の儀迄も夫々へ申渡の上相當の處評議致し可被申聞候事

佐藤融齋御赦之儀に付御尋之趣取調申上候書付

鳥居甲斐守

佐藤融齋儀一人引扱御赦の儀は規則にも拘はり候に付難相成候併海防其外御國益筋之儀相心得居候ものに付御當地へ呼寄御藥園其外可然場所之内へ住居禁足申付相應の扶助米被下其筋へ相尋候御用之外他人面會差留右之趣にも相成候事は何れ可有之候哉差支の有無早々御調可申上候尤御書面の趣にて差支の筋も無之候はゞ御當地にて住居の場所幷扶助米の儀迄も夫々へ申談の上相當之處評議仕可申上例書御渡御書取を以て被仰渡候

此融齋儀先達而御仕置被仰付候後老年に至り候得共勤學博識のものにて農書其外國益に相成候書籍著述致し尋常の者には不相聞右犯科早速年數も相立候間御憐愍之儀申上候得共壹人引扱御赦の儀は規則にも拘り候に付難相成候に付御尋の趣御尤奉存候に付猶勘辨仕候處御書扱例之幸太夫磯吉儀は外國へ漂流致し候ものに付惡事等は無之候得共外國の樣子猥りに物語不致爲め禁錮被仰付候者に有之融齋儀は御搆内へ立入候犯科によりて江戸十里四方追放被仰付候者に付御搆内へ呼寄

住居爲致候儀は元濟等も無御坐最御規則に拘り可申に付引扱御赦に難相成儀に御坐候はゞ差當外に取扱振無御坐候間追々外一同大赦之節御免被仰付候方可然尤海防其外御國益に相成候著述之書は御取寄御覽御坐候共差支の儀は有御坐間敷哉に奉存候

右取調候趣評定所一坐へも相談仕候處書面の通御坐候依之御渡被成候御書取幷例書共返上此段申上候以上

卯七月

卯七月二十三日御下

覺

鳥居甲斐守

佐藤融齋儀海防御國益筋之義相心得居候ものには候得共引扱御赦の儀は規則にも拘はり候併尋常之ものには無之譯を以て被申立候程之儀に付著述之書籍類取寄一見可致は申迄も無之候書物而已にては秘事實用細微相分兼候旡も可有之一同の御赦相待候は論も無之候得共老年之事故餘命之程も難計彼是いたし候内遂に相尋候場合にも至り不申候ては御益にも可相成との見込を以て被申立候趣も空しく相成歎敷次第に有之候間後弊に不相成御國益に相成候主法最前相尋候義に有之尤無罪のものと者譯違ひ幸大夫磯吉抔とは更に趣意相違可見合例には無之候得共前儀の取扱振聊か取用ひにも可相

成廉も可有之哉と申迄にて右例に引附可被取調との儀には無之候間最前相尋候意味篤と勘辨いたし別義之廉を以て當地へ呼寄禁足申付御用筋相尋候義は差支無之主法今一應取調可被申聞候事

卯八月三日御直上る

佐藤融齋御當地へ呼寄候儀に付御尋之趣取調申上候書付

鳥居甲斐守

佐藤融齋儀海防幷御國益筋の儀相心得居候者には候得共引抜御赦之儀は規則にも拘り候併尋常のものには無之譯を以て申上候程に付著述之書籍類取寄御一見の儀は申迄も無之候書物而已にては秘事實用細微相分兼候廉可有之一同の御赦相待候は論も無之候得共老年の事故餘命之程も難計彼是致し候内遂に御尋の場合にも至り不申候而は御益にも可相成との見込を以て申上候趣も空しく相成歎敷次第に有之候間後弊不相成御國益相成候主法最前御尋の儀に有之尤無罪のものとは譯違ひ幸大夫磯吉抔とは更に趣意も違可申合例にも無之候得共別儀の取扱振聊取用にも相成廉に可有之哉と申迄にて右例に引附可被取調との儀には無之候間最前御尋御坐候意味篤と勘辨致し別儀の廉を以て御當地へ呼寄禁足申付御用筋相尋候儀を差支無之主法今一應可申上旨御書取を以て被仰渡候

此儀縱令御國禁を犯し候者にても其次第により其罪を宥られ候儀も御坐候に付融齋儀は素輕罪のものにて其上老年迄文學勉勵御國益相成候著述も仕候ものに付引抜御赦被仰付候は一時應變の御所置候とも御規則に拘り候儀も有之間敷候得共御搆場立入之廉を以て御仕置被仰付候者其罪不被差免其身は御搆場内へ御呼寄御扶助等被下置候は一躰の事情に於て如何可有之候や且御仕置の詮不相立後來の法則に拘り候に付再三御沙汰の次第も御坐候へ共別段取調方無御坐候尤も評定所一座へ相談仕候上此段申上候依之被成御渡御書取返上仕候以上

卯七月

鳥居甲斐守

於是乎當時の俊傑鹽谷甲藏亦大に力を盡くして御赦を得んことを計り關善左衞門に托して、薦佐藤信淵狀を幕府に上る。其書に曰く、

去月廿九日御次へ罷出候處、山川大七一通之書付持出シ、此書面ニ有之候書物知人之内所持イタシ候者有之哉御尋之旨相達候間拜見仕候處其書名不殘佐藤祐齋ト申者一家秘傳之書ニテ其内二三部ハ私當時借置候趣御答申上候處則可入御覽旨被仰出指上置候一躰右祐齋儀父祖五代以來農政物産水利測量兵學炮術等ヲ致精究其著述之書數十部百餘卷有之入門仕候者へハ誓詞ヲ取候テ傳候事ニテ父祖以來段々實功モ御坐候由近クハ祐齋父庄九郎ト申者明和安永年中本多彈正大弼御用ニ相成御在所ニ於テ功績モ相立申候祐齋事モ弱年ヨリ諸國ヲ遊學仕物産水利農政ハ勿論海防迄モ心掛ケ

諸國海邊ノ地理ヲ相考ヘ鉄炮火術ヲ熟練イタシ文化年中阿州様御家老集堂雄左衛門ト申者同人ヲ深致信向徳島ヘ相招海防水戰々術相談有之其外伊達遠江守様九鬼式部少輔様松平内匠様江川太郎左衛門様抔ヘ御師範ヲイタシ國政武備之御内談ニモ預申候十二三年前同人深川八幡社内ニ致住居候時分私モ入門仕候然ル處仝人儀御科ヲ蒙者之由其後始メテ承申候其始末ハ同人事本所ニ罷在候神道方吉川源十郎殿講談所學頭相勤候時分仝所普請之儀ニ付間違筋有之寺社御奉行所ヘ御召出御吟味ニ相成候處其事師匠家之難儀ニ及ヒ且又其門人共多勢科人モ出來可致程之儀ニ付御奉行内藤豊前守様御理解ニテ祐齋學頭之儀ニ付師家之危難并同門之朋友ヲ救候心得ニテ一人罪ヲ引受江戸拂ト相成候テ深川ニ住居仕候事之由其後天保三年同人悴升庵宅ヘ二夜止宿仕候御咎ニ付町奉行筒井伊賀守様御吟味ニテ江戸十里四方追放ト相成當時武州足立郡鹿手袋村ニ罷在候右之通御科ヲ蒙候モノニ御坐候ヘ𪜈其始ハ師友之咎ヲ引受候事實之由ニテ利欲ニ拘リ候筋ニモ無之扨其天文地理農政水利軍學火術ニ至リ候テハ父祖以來一家相傳之秘術ニテ當時無類之學風ニ御坐候處御府内ニ住居不相成身分ニテ於田舍朽果候節ハ家傳之書往々斷絶可致門弟共ニ於テハ殘念至極之儀ニ奉存候尤モ御科ヲ蒙候後餘程年數モ相立候間悴升庵ヨリ

御法事之度ニ上野　宮様ヘ御赦免願書指出候處御落手ニハ相成候ヘ𪜈如何ノ譯有之候哉御奉行ノ方ヲ内々承合候處一向相廻リ不申由ニ御坐候祐齋事當年七十六歳旦暮死ニ迫リ候身ニ御坐候處御赦免願ノ儀右様之次第ニテ一向目的モ無之儀ニ付其親族ハ勿論門弟共ニ於モ一同詮方無之常ニ悲歎罷在候然ル處過日大七ヲ以テ右著述之書物御尋有之追々指上候事ニ相成候間誠ニ祐齋開運ノ時節到來ト天命ノ程難有奉存候事ニ御坐候就テ私身分ヲ相掛且御科人ノ事申上候段重々奉恐入候ヘ𪜈一旦師弟ノ契約モ結候者ニ御坐候間上ノ思召ヲモ不奉顧乍恐上書仕度奉存候此上書御内見被成下不苦思召候ハヾ何卒御指出被下候様偏ニ奉希候依之升庵ヨリ　宮様ヘ指出候願書ノ寫入御覽候罪狀ノ荒増ハ此願書ニテ相分候ヘ𪜈尚又以演舌申上度儀モ御坐候以上

月　日　　鹽谷甲藏

岡善左衛門様

論薦佐藤信淵狀

右其人、學通古今、兼精算數、鑽研農政水利兵制火術、少壯周遊天下、親驗其所學、後爲二三諸侯所招、經署其國務、皆有實蹟、非空言也、自言其學傳自父祖、書號國土經緯論者二卷、曰垂統法話者三卷、曰開物新書十卷、高祖良信利著。曰氣候審驗錄者五卷、曰勸農要錄者三卷曾祖信榮所作。曰土性辨者五卷、曰堤防溝洫志者七卷、曰通移開圖法者一卷、祖父信景所述。曰甲州傳水利法者一

卷、曰漁村維持法者二卷、曰坑塲法律者二卷、父信季所筆。至於信淵、集而大成之、所著有農政本論、經濟要錄、培養秘錄、籌海新書、三銃用法論、兵法一家言、卿木六部耕種法等數十部、皆言富國强兵之策、臣雖未知其言可悉用與否、而若其學殖器能、亦可稱博且偉矣、獨恨其人身嬰微罪不得往都下、潛在近郡莽澤中今年七十有六、將塡死溝壑、實爲可怜也已、伏惟先皇取周官唐律之意、刑部省著六議之例、其一曰議能、蓋謂人雖有罪、商議其才能、得以從末減也、而孔子之論政、首曰赦小過舉賢才、今以臣所聞、則信淵之過可謂小、而至其器能、豈不可入於所議之條乎、側聞大君聖明、厲精圖治、思賢如渴、勿論乎其庶官得人、或擢匹士、或徵陪臣、或褒草茅之民、莫一物不被其光、當是時、有奇材異能如信淵者、負罪於 先朝、埋沒卿野、不得再覩天日、臣竊爲 國家惜焉、臣於信淵、嘗執弟子之禮、雖出位言事、罪當万死而生三之義、無奈情不容嘿也、是以冒斧鉞之誅、敢陳之左右伏願 大恩特赦信淵之罪、令得還居都下、以公其家傳之書、以惠後進焉、無任懇禱之至、臣世弘誠惶誠恐、死罪死罪、

後ち弘化三年十月に至り果然其科を赦さる、翁乃ち江戸に出て、其子昇庵の宅に於て老衰を慰す。時に天下の形勢益々多事にして、魯英等の船艦怒濤を破りて我沿岸に出沒し沿岸の士民洶々たり、且つ北邊魯人の警戒日に嚴しく、又世の所謂赤人の騷き起り、翁憂心措く能はず、慷慨自ら振ひ、好んで外夷折衝の術を談す。

偶ま安濃津侯外夷の我を窺窬するあるを憂ひ、翁に諮ふに外寇防禦の事を以てす、翁乃ち泰西諸國の形勢を觀察して魯佛英米の對外策を論し、彼等が貪婪の念を起し、殘暴の行を縱にして、弱國を呑噬するの實狀を審にし、莫臥兒の患を鑑み、滿清の難を察して、武備擴張の六策を立て、遂に万邦を囊括するの大論を述べ、呑海肇基論と題して將さに之を献せんとす。昇庵之を讀んで大に驚き、諫めて曰く「此書は實に是れ世界を混同し万邦を統一するの大議論にて八十老翁の壯心感伏に堪へたり、然りと雖も家嚴は草間の小父なり、卑賤にして如此の大議論を爲す者は、往々不測の大患に遇ふは家嚴の知る所なり、假令官の府庫倉稟を滿溢せしめ蠻夷を威攝するの良策なりと雖も今の世に當りて、天下の人皆一統太平の繁華を樂むの時に於て如此の大論を見は、皆必ず狂にあらされは耄せりとして、誰か家嚴の說を信する者あらんや。況んや安濃津侯は堂々たる大國の主にして、賢臣智士雲霞の如くなるおや。然るに家嚴老耄の年を以て、骨鯁にして寡合の言を献すと雖も君侯に益なくして徒らに多士の嫉を受けんのみ、家嚴か阿藩大夫集堂氏に於けるが如き亦顧るへきなり、且又此書世上に漏は或は越俎の刑あらんことを畏る願くは固く辭して此書を献すること勿れ」と書を抱て悲泣連日休まず、翁其言の一理あるを以て、遂に侯の請問を辭せり。

後ち侯の請問に因りて水陸戰法錄を著はし、以て清英の戰爭を詳評して、大に顧みる所あらしむ、其序の略に曰く「皇國の武士、戰爭に勇壯なるは万邦に比類あることなし、且つ陸戰は殊更に强し、然れとも西洋人と戰ふには水戰は論するに及はず、陸戰と雖も預め心得居らずんはある可からさるものなり、何となれは、滿清國は皇國に亞きたる武國にて、殊に陸地の戰鬪に極めて强くして、二百餘年來東西南北の夷狄を皆悉く併呑して、地方万里、其廣袤歐羅巴全州よりも大なり、境内南北二京十八省あり、而して人民一億四五千万、海陸軍卒の數三百八十餘万あり、其富饒なること與に比すへきものなし、故に今の世に當りては世界第一の强盛國なりし、然るに此は九年以前より、阿片煙草の禁に因て西洋英吉利國と怨を搆て爭亂に及ひ、與に戰ふて敗衂し、其後每戰大に失敗し、遂に五都會の地を割き且賃金を出して和を乞ふに至れり、清國從來血戰に勇猛なりし滿兵を率ゐて嚴城絶壁の要害に據り、數多の炮銃の利器を備へ、主を以て客を防き、而して一戰も勝つ能はず、一城をも守ること能はずして夷狄共の中華を取るに無人の境に入るか如く、僅か兩三年間に數多の雄鎭を奪ひ取られ、却て貢を納るに至れるは、天地開闢以來未曾有の珍事なり、余大に之を驚異せり、然れは皇國武士の勇武と雖も西洋人と戰ふには豫め心得へきの事なり。津侯も亦之を驚異し給ひたるにや愚老を召して西洋人と接戰の法を問ひ給ふ、予對て曰く、豫め心得へきのみと君侯曰く

「何の謂ぞや」對て曰く、先つ能く滿清人每戰敗績したる所以を探索して、其理を得ることあらは則ち故道を變して其轍を履むことなからしめ、又英吉利人の每戰勝利を得たる所以を探索して其理を得ることあらは則ち故道を乘り越して、彼れに其度を失はしむるの策を行ふ可べし、是れ國家に主たる者の心得べき事なり、」と因りて水陸二戰の心得とすへき事を述へ、清英合戰を記する每に清國の敗れたると、英國の勝ちたる所以の戰法を詳論して之を献す。

是れより先き綾部侯の爲めに禦海儲言を著はして大に水戰の法を論し、外冦防禦の策を立てり。又伊達公の爲めに東西火攻辨、火攻深秘錄等を著はして之を献す、其他兵學武備に關するの著書甚た多し、陸戰に於ては兵法一家言を以て其詳細を盡せり、蓋し翁か軍略上の方針は常に「彼を攻むるは我を護る所以なり、故に彼を逆へ打つにあらされは、我の勝利を得べからず」と、於是乎高祖父歡庵翁以來藏せし東西の共書、殆んと一千部の多きを拆裂咀嚼して、新に卓拔の識見を立て、加ふるに西洋の兵術火技を以て之を大成し、崭然として一家言を立つるに至れり、是れ翁を以て我國西洋砲術家の嚆矢となす所以なり。而して泰西人すら未た夢想せさるの時に於て翁か新見發明にかゝる者多し、彼の自走火船の如き其一なり。軍事を講する者須らく三省すべし。

弘化四年六月忽ち阿蘭陀の船將ヅヨセフヘンリ、レヒッン一封の書を齎し來る、翁の和譯に因るに

曰く、

此節咬嚩吧の頭役より　御國御執政方へ相達し候樣申越の儀左に奉申上候

一、天保十四卯年八月廿二日被仰渡候日本漂流人送越の儀幷に日本地方測量の儀に付阿蘭陀執政の者より御達しの趣、エゲレス國フランス國並に北アメリカ合衆國の役館へ相達し候處各國執政より申越し候佛郎察國に於て日本國に通商彼是駈け引等致度所存無之候就ては昨年日本に渡海の佛郎察船も全く右船の加皮丹セシルシ一己の存寄にて敢て本國官府より命を受けて乘渡たる事には無之段申越候

一、英吉利國攝政より日本御役筋へ通達致し呉候樣に申越には大抵歐羅巴洲にて各自立の國より他邦への通達は直々其國より引合す習にして此規矩を事柄に因り要々適然の事と致候勿論エゲレス國攝政に於て規矩相守る事に候得は日本御奉行所よりの御達事有之候はゞ其御携之御役人共より直々承るへき事に候格別其筋を離れ他邦手筋を以ての通達は受かたきの趣に申候

一、北アメリカ合衆國攝政よりの答は阿蘭陀より仕出の船彼の地出帆の頃は何れとも不申越候

右エゲレス國の書中に今度ホンコンの奉行フユルラユレーと唱る蒸氣船を以て舟山島並に清國北方の諸侯え罷越候序に御當國えも可罷越の由に申し候尤廣東に混雜有之手間取可申乎に奉存

候

右の趣き江府え被仰上被下度謹みて奉願上候

加比丹　ジョセフヘンリーレヒソン

椿園翁之に附言して曰く、右和蘭人の差上たる風説書の如くなるときは、英吉利國の使者船は、遲くも五七年の内には、我國漂流人を送りて來ることなるべし。又佛郎察國執政の者は、本邦に通商彼是と駈引致すへき所存無之と云ふと雖も、彼國加皮丹セシレルなる著、五六年以來我琉球に年々來て永く逗留し、和親交易を勸むるを見れば、本邦に通商等の望みなしと云ふは、彼國執政等の遊辭なるべし。又北アメリカ洲の合衆國攝政より和蘭人に答の無かりしことは、彼國近來兵威漸々強きを以て、彼も亦他邦の手筋を假ることを欲せさるか故なり、其仔細は一昨午の年、右合衆國の船我國漂流人を送りて、浦賀港に來舶し、十日許滞留して皈れり、且又當申年の春より十餘艘の異國船來て、綏々と北海蝦夷地、並に南部津輕の海邊、其外出羽、越後、佐渡、越中、加賀、能登、越前等の海上を遊歴して、水路の深淺と、地方の里程等を測量する乎の樣子に見得たりと云ふ、此證船も亦恐らくは北アメリカ洲合衆國の夷人等なるべし。抑此合衆國と云ふは、最初我蝦夷地の如く茫々たる曠野にて稀に鄙しき夷人の居住する處あれとも、村落を成すにもあらず、實に無人の鄉の

如し、其後英吉利國より、新エゲレスを拓き我万治年中始めて此地に人種を移す、尋て又享保中此部中チウヨルク及コンチクチキユットの地に各數百の人種を移す、然れども當時は寂寞たる寒鄉にして、記載すべきの者無かりしと云ふ、其後數年英吉利國の人民、其定法の教化に從はさる者あり、因て其種類の人民萬餘人を捕へて、悉く之を此地に遷す、其遷移の民等、初は飲食衣服に困窮しけれども此地には君長無く、年貢賦税と云ふ事も無く、万物皆作り取りなるを以て、皆共に相謀り、心を合せ力を盡して山野を鑿り、水流を通し、土田を開き、耕農を勵み、又海濱には漁鹽の業を始め且又先年より居住する山谷諸處の土人と共和し數十年を經歷するの間に、見孫大に蕃息して三十餘万に及ひ、種々有用の物産夥く出てゝ、遂に英吉利國人の來りて交易するに至れり、是を共和政治と名く、其國に君なく、政事は國人共和して此を議し、其時宜に從ふを以てなり。最初は八州ありしに次て十三州となれり、我寶暦の末英吉利國より、此國の人民を自國の用に使はんことを令す、國人其令に從はず、英國人大に之を憤り、戰艦數艘を發し來りて此を攻む、時に共和十三州の政官會議して曰く「英國は我國を視ること己か屬國の如し長く絶交するに宜し」と共に力を盡くして防戰す、英人勝つこと能はず遂に退き去れり。我安永九年英吉利人と共に誓ふて長く獨立國と爲れり、爾來國勢倍々強く、近隣の諸國愈々多く此に加り、同盟三十餘州に至れり、然れども國君酋長等の

有るに非らず、其國毎に賢者を推して政官と爲し、其命令を敬ひ守るのみ。士人數種にして其俗同しからずと雖も、彼是れ貴賤の別を設ることなし、今は其土地廣大にして、南は墨是哥に至り、北は新エゲレスに接し、各國皆學校を設けて、國家を經濟するの學を講明す、其中に於てニイウヨロク摸斯東マスギユセッツ等の如きは羅甸學及支那國の學、天文地理の學物産開物の學、醫學兵學等を精究せしめ、巧麗なる觀象臺を築き、且つ數万種の草木園を作り、數多の書籍を積んで生徒を教育し、又水陸の演武場を設けて軍卒を教練し、騎馬歩兵の進退周旋を習はし、且つ航海舟戰の法律を熟練せしめ、炮術火攻の精粹を極めしむ、故に合衆國には賢材の士と勇略の將を出すこと甚し、此地南部は專ら農を勵み、北部は諸種の器什を造り、東西二部は漁鹽の利を收め、或は四方に貿易す、其到る處の諸州は歐羅巴及印度諸島、支那國を其最とす、闔州の人口一千四百二十四万餘あり、此數は我天保六年に西洋人の記する所なり、其内兵卒八十餘万と定め軍船八十一艘有りと云ふ、此内近來甚富て、兵威極めて強し、故に土地廣く居人の少き國を求得て、己れか國の如く、此を開發せんことを欲し、常に大洋中を游航して此を探索す、我文化年中以來長崎へも三度來れりと云ふ風聞あり、此に由て按するに當年の春より、我北海中を遊奕する者は、必す彼の合衆國の夷人等、蝦夷國の人の稀なるを窺得て、之を開かんと欲するの念を起せるなるべし、昔し北亞墨利加洲、ロイ

シアナの地は、伊斯把爾亞國の持なりしを、佛郎察國より此を攻取て、我文化元年佛郎察より此地を百五十万金の價にて、合衆國に賣渡せり、今合衆國中ロイシアナ、オルレアンス、ミツシスツピの三州は此地三部に分れたるなり、此を以て彼國の土地を得んことを察すべし」と翁の活眼能く宇内の形勢を明にして其機微を洞察す、故に其言崭新にして往々人の意表に出て、其論亦正確にして鑿々肯綮を得、當時泰西の事を言ふ者を目して國賊と呼ひ彼の國人を禽獸視して無謀の攘夷を唱ふる者何んぞ與に語るに足らんや。後果せる哉、翁の豫言に違はず、嘉永六年六月米國水師提督ペルリー、軍艦蒸氣船各二艘を率ゐて浦賀に來り、大統領ヒユームの書を呈して通商貿易を乞ふ。士民愕然として大に驚き、江戸騒擾し武器の價俄に數十倍し老幼は近村に逃るゝに至れり、於是乎江戸瀬海に軍備を設け、先つ三礮臺を品川海に築き、會津、忍、河越三藩をして之を守り、肥後長門二藩に相海を禦き、備前、柳川に房總海、因幡に木牧、彦根に羽田、大森を禦かしむ、又外國奉行を置きて外人の應接を掌り、下田箱兩奉行を置き、外船の事を措置せしむ、又蘭人に命して軍艦兵書を購求し、麾下に命して銃礮は專ら洋法を講せしめ、後ち榎本武揚等十餘名を和蘭に遣り、軍艦製造を監臨し、兼て造艦航海諸術を學はしむ、水戸齊昭を起して、軍制改革を委し、講武所を設けて、銃礮劒槍等を講習し、奉行二人之を督し、兼て軍政の改革に參す、又海軍操練所を築地に設け、軍

艦奉行之を督し、蕃書調所を九段坂に設く。

是れより先きペルリー去て、後ち魯西亞水師提督プーチヤチン軍艦四艘を以て長崎に來り、柯太の境界を定め且つ貿易せんと乞ふ、幕府人を遣して應接せしむ。安政元年正月ペルリー再ひ浦賀に來る、幕府下田、箱館二港に於て薪水食料を給するとを許す、魯、英、佛三使繼き至る、並に約を結ふこと前の如し、尋て又米人ハルリス來り往復辨論殆んと二年を經て、安政五年幕府遂に長崎、箱館、神奈川、兵庫、新潟五港を開きて自由貿易を許し、米、魯、英、佛、蘭の五國と假條約を結ふ、時に議論紛々として公武合躰の論起る、後ち薊齒牙、普魯士、瑞西、白耳義、以太利、丁抹相繼て通商を乞ふ、幕府並に之を許して條約を締ふや、攘夷の議論益々甚しく、或は生麥の變となり、或は下の關の砲擊となり、志士奮起して勤王佐幕を唱ふと雖も、大勢の赴く所遂に支ふべからずして幕府政權の奉還となる、於是乎大政朝廷に復して、施政の綱紀大に變す。西鄕、大久保、木戸等内外の形勢を察し、元弘建武に鑑み、公武貴賤を通して、上下公共の政躰を創め、万國並立の規摸を建てんと欲す、三條、岩倉諸氏之を用ひ、因て丁卯の改革となり、官制の改革となり、明治中興の基礎茲に定まる。然り而して翁か經劃せし後ち五章の誓文となり、官制の改革となり、明治中興の基礎茲に定まる。然り而して翁か經劃せし三臺六府二京十四省の制益々行はるゝに至れり、是れ翁か卓見の存する所なり。翁常に曰く「吾說

今日用られすと雖も、後世英雄の主出るあらは必ず我家學を以て宇内を一新する者あらん」と、余茲に於て乎翁の言、人を誣ひさゝることを信するものなり。

嗚呼、天資英邁剛毅にして幾艱難に遇ふも其説を枉けず、該博の識、千古の卓見を以て、皇基を万世に維持し、宇内を統括し、万邦を一致するの雄圖を劃せる大經濟家椿園佐藤信淵翁は今を去ること殆んと四十三年前、病魔に侵され蓐に就く、日に益衰憊して遂に食を斷つに至ること百餘日其間酒漿を以て糧となす、臥床尚存華狵狄論の稿を改む、翌嘉永三年正月元日病大に革まり、危坐産靈を拜し、終りて詩を得たり、乃ち其子昇庵に命して之を書せしむ、曰く、

欲獲龍王到北海、龍等逃去更無逢、試操大煩射溟漠、一發連貫十万龍、

と而して神色自若たり、何んそ其意氣の壯豪なるや、後ち正月六日鼾然睡るか如くにして卒す、壽八十二、江戸淺草森下町松應寺に葬る、法諡して

眞武院堅剛德祐居士

と號す、配笹原氏を娶る子なくして卒す、後渡邊氏を迎へて四男二女を生む、長男信昭、次男奕三郎、三男勘四郎、四女某、以上三人夭す、五女某に適く、六男祐三幼にして頴悟年甫めて十三年にして父に從ひて四方を遊歴すること五年、箕裘の業を繼く此人にありとす、惜哉旅中肺瘍を患へて卒す年十八、先塋の墓側に葬る、長子信昭家學を繼く、嘗て父の命に依り南部藩に仕ふ後ち辭して諸州を遊歴すること十餘年、幕府の末に當り、内憂外患頻りに起る、信昭深く之を慷慨して、大に經劃する所あり、然れとも其言容れられず、遂に病に罹りて卒す、因て繼妻の姪米太郎を以て其家を繼かしむ、後ち米太郎出て、山本氏を冒すに及んで、翁の遺稿遺物を擧けて織田完氏に囑す、後ち繼妻も亦他に適く、此に至りて家系斷絶す、明治十五年秋田佐藤元清其後を繼く。

明治十四年九月　聖駕奥羽諸州を巡幸して秋田に駐蹕せらる、時に羽生氏熟〻翁の事蹟を具狀す。同十五年六月三日朝廷特旨を以て正五位を追贈せらる、翁於是乎瞑すべし。

佐藤信淵翁傳 終

附錄

翁が逸事奇聞の本傳に漏れたるもの二三を左に擧く。

一信淵嘗て鄉人平田篤胤を訪ふ、時に篤胤讀書に汲々たり、信淵問ふて曰く、何の書を讀むや、と篤胤答ふるに一切經を讀むことを以てす、信淵笑ふて曰く、何んぞ此書を讀むの遲きや、吾既に三たひ之を繙けり、と篤胤大に驚き、且つ一切經中の事を擧けて之を試むるに、信淵如何なる所と雖も之に答ふるに義理明通。篤胤其精究を感服す。是より先き篤胤皇國古道學を唱へて大に忠君愛國の志氣を鼓舞するや、信淵其說を聞きて益々皇學を精究す、後ち相共に往來して事理を論するや、嶄新奇拔の卓論を吐て辯難論義、往々徹夜に及ふことあり、彼の信淵か新得の產靈の元運を論するや相互に辯難論義殆んと三晝夜に亘れり、信淵始め篤胤に就て其說を聞きしも、後ち篤胤を凌いて自家獨得の新見を皇學上に立て、佐藤の一派を開きしも、既に此時に胚胎せり、而して泰西の譯說は篤胤も信淵に就て其說を聞きて大に知見を博めたりと云ふ。

一山縣敎授江戸鹽谷世弘は翁に從て經濟の學を修め翁の爲めに盡力せしことは本傳に記せしか、嘗て愼德大君の立て弊政を一新せんとするや、凡そ言、富强に涉る者は擇采する所あり、會ま近江守岡本君司會たり、世弘君と當世の人物を論して翁の事に及ふ、君之を領して時相に進めんとす時

相亦之を用ふるの意あり、後ち幾何ならずして岡本君官を去り尋て時事一變し而して翁亦病んて卒するや世弘大に之を惜み、後ち人に遇ふ毎に翁の逸事を談して措かざりしと云ふ。

一翁嘗て江戸雁鍋屋（上野公園前）の樓に上り、杯酒を呼んて大に痛飲す、後ち下婢を招きて俎板と小刀とを借り、傍らの一室に入りて、嚴しく此室に入ることを禁す、婢命を受けて退く、他婢不一意に襖を開きて其室に入れは、翁婦女の生首を手に取り、其頭球を抉出して流血淋漓たり、婢大に驚きて氣絶す、是れ翁か眼睛を觀察して醫術上の試驗を爲せるなり、翁か眼科の醫術に妙を得たるは之か爲めなりと云ふ。

一翁常に淺黄木綿の麻匝頭巾を冠れり、某問ふて曰く翁年中冠を脱せさるは何故そや、と翁答へて曰く、蚊蠅を厭ふと、又常に山慈姑の湯を好み、他出するときは自ら携へて之を飲むこと貴顯を憚らず、酒に至りて毎日五合以上を飲まさることなし而して肴は僅かに魚肉なれは一寸四方のも の二個あれは充分なりと、彼の華山大獄の際逃れて竹口某の家に隱るゝや、葱味噌と酒あれは事足ると飯食せさること殆んと三週間然れとも平然として元氣少しも衰へすと云ふ。

一始め宇田川の門に在るや、貧にして燈油を購ふの資なし、僅かに線香を焚き其光影にて書を讀むること殆んと歳餘の久しきに及べりと云ふ、其精究驚く可し、翁常に貧に素して晏如たり、其四

海を遊歴するや山野に露宿し菜根を咬んて餓を凌きしこと往々ありと云ふ。

佐藤椿園家傳書目錄

佐藤家ノ著書三百部八千卷アリト傳フレ𪜈其書目ヲモ散逸シテ之ヲ得ルコト能ハズ左ニ掲クル書目ハ余カ翁ノ著書ヲ讀ムノ際集メシモノニシテ其中○印ハ翁ノ傳ヲ草スルニ當リテ引用セシモノナリ而シテ其細註ハ翁自ラ之ヲ加ヘテ其子昇庵ニ與ヘシモノナレハ今翁ノ書ヲ讀マントスルモノヽ便ニ供センガ爲メニ茲ニ之ヲ掲ク讀者夫レ之ヲ諒セヨ　穆山識

○一農政本論十卷

此書ハ序例一卷初篇三卷中篇三卷後篇三卷アリ○初篇ハ神代農事基原ヨリ神武天皇耕種ノ業ヲ諸國ニ弘メ給ヒ崇神垂仁景行三帝專ラ農務ヲ大切ニ成サレ其後孝德天皇ノ御世ニ始メテ租庸調ノ制定リタルヲ說キ且封祿位田職分田季祿神地田代等ノ事ヲ記シ陽成天皇ノ莊園ヲ賜フヿ始リテヨリ其事增長シテ大ニ國家ノ禍トナリ皇朝衰微シ天下ノ土地人民政事ノ三寶皆共ニ天子ヲ離レテ悉ク武家ノ有ト成レリ覇府起テヨリ桝ノ制度モ改リ貢稅モ段給ト爲リ又錢給トナリ石高ト改レリ五六ノ法六尺一歩ノ法撿地之法竿入ノ法式田畑位附之法根元取箇之法等ヲ說キタリ○中篇ハ田畑ノ名目諸國石代ノ定法反物成ノ法上方田畑米取ノ法上方二割增ノ說出目米闕米込米ノ說御代官所入用ノ定法口永三役夫米莊大豆納七百文出目ノ算法等物成浮役新田御定法定免勘合ノ說毛見ノ法佐竹家等ノ說ヲ記セリ○後篇ハ手代毛見坪刈帳奧書ノ事毛見勘定ノ法ヲ減內二割引外二割引勘定ノ法年貢收納ノ法內密救助講ノ仕方社倉ノ仕方廣濟館療病館育兒堂ヲ立ル說又商人ノ取締リ並ニ金借撲買人等取締ノ說且又兼併豪富ナル鉅商大農等ハ小百姓ノ家產ヲ奪テ兼併シ貧人ヲ困マシムルヿ極テ甚ク人君ノ天意ヲ奉テ人民ヲ救フニハ大ナル邪魔ナリ深ク慮ラスンハアルヘカラザル論ヲ記シ又百姓ヲ敎化シテ農業ヲ勉强セシムルニハ神事ヲ喜

躍スルヨリ妙ナルハナシ故ニ田舍祭ヲ辟ニ論セリ是昔公劉ノ大ニ幽國ヲ富シタル法ナリ

此書ハ禹稷躬稼タル法ノ餘裔ナリ農政ニ善ヲ盡スニハ別ニ此論ノ羽翼タル七部書アリ其一ヲ國土經緯論ト曰ヒ其二ヲ氣候審驗錄ト曰ヒ其三ヲ土性辨ト曰ヒ其四ヲ堤防溝洫志ト曰ヒ其五ヲ草木六部耕種法ト曰ヒ第六ヲ培養秘錄ト曰ヒ第七ヲ種樹秘要ト曰フ。

一國土經緯論二卷

此ハ天文地理測盡ノ書ニテ國ノ繪圖ヲ精密ニ製スル法ヲ辟ニ記セリ凡ソ國繪圖ハ上天皇象ノ度分秒ト地上行程ノ度分秒ヲ測盡シテ天ト地ヲ能合脉セシメテ制スヘシ天象ノ一度ハ大概地上の行程三十里ナルカ故ニ天ノ一分ハ地ノ十八町ニ當リ天ノ一秒ハ地ノ十八間ニ當ルナリ故ニ國繪圖ノ紙上ニ度分秒郡ヲ引キ精密ニ國土ヲ測リ天度ニ合シテ其紙上ノ郡ニ國ヲ繪ク時ハ其國ニテ國ノ東西ハ幾里幾丁何十間南北ハ何程アルト云フ明細ニ分リ假令ハ領内ノ山ハ幾万坪野ハ幾万田畑ハ何程城地村里寺社等何十何万坪アルト云フ皆明細ニ知ルヽヲ以テ物産ヲ興スニハ殊更ニ要用アリ何トナレハ一里四方ノ地ハ四百六十五万六千坪アルカ故ニ此ヲ田ニ墾キ一坪ヨリ米一升ツヽ生スルトキハ四万六千五百六十石ナリ又此一坪ヨリ年ニ一匁ツヽノ産物ヲ作ルトキハ毎年七千六百兩ツヽノ代金ナリ故ニ精密ナル國圖ハ他國ノ人ニ見セシムヘキ者ニ非ズ國ノ分限ヲ暗算セラルヽヲ以テナリ土地ノ物ヲ生スル廣大無量ニシテ盡ルヿノナキ者ナリ孟子ノ說タル人君ノ寶トハ即チ是ナリ

此書ハ高祖勳庵翁所著ニテ凡天功ヲ亮クルノ學ハ此書ヲ以テ最初第一トスヘシト云ヘリ

○一氣候審驗錄五卷

此書ハ昔帝堯羲和兄弟四人ヲ四遣ノ地ニ分宅セシメ氣候寒暖ノ強弱ヲ審驗シ寒暑ノ大過ト不及ニ因テ作物ノ合不合アルヿヲ明ニシ百姓ニ其時ヲ授ケ農事ニ心ヲ盡シタル法ニテ至　天恩ヲ敬シ天意ヲ奉ルノ政事トハ是ナリ我曾祖父元庵堯舜ノ道ヲ崇敬スルヿ篤ク亮天功ノ學ヲ修メテ父獄庵翁ノ命ヲ受ケ少壯ノ時ヨリ遍ク四海ヲ遊歷シ國々ノ氣候寒暑ノ強弱ヲ驗シ琉球ニ渡リ蝦夷ニ行キ且諸所ニ越年シ工夫探索スルヿ四十餘年又阿蘭陀人ニモ詢ヒ謀リ四洋地志等ニ就テ熟々按スルニ寒暑強弱ノ次第アルヿ赤道下ヨリ兩極規ニ至リ六十六七度ノ間ニ寒暖ノ強弱大抵二十四番ノ氣候行ハル凡ソ草木鳥獸蟲魚等ノ化育スルニ各其物ニ適宜ナル氣候ノ養ヲ得テ生長豐熟ノ功ヲ全スルヿヲ發明セリ故ニ草木諸作物其適宜ノ氣候ヨリ一番寒キ所ニ植ルトキハ其豐熟モ一等劣リ且其物モ一等下品ナリト知ルヘシ又溫暖ニ過クルモ此ニ同シ凡寒地ニ繁榮スル者ハ暖國ニ衰微シ熱地ニ滋蔓スル者ハ寒國ニ凋瘁ス即チ是天地ノ定理ナリ故ニ草木其適宜ノ氣候ヨリ寒溫十番以上差ヒタル國土ニ種植スルトキハ大抵消滅シテ種ヲ失フニ至ル不可不察也抑氣候ノ寒暖ヲ審ニシ農事ニ精密ヲ究ルヿハ即チ堯舜ノ道ナリ

○一土性辨五卷

凡土性ニ壤土（ハウキ）アリ埴土（ハニ）アリ壤土（ウコモツ）アリ此三種ヲ眞土ト稱ス又塗泥（ダブ）アリ壏土（ノツチ）アリ沙斤（スナチ）アリ此三種ヲ擬土（デモツチ）ト稱ス此ヲ合シテ六土ト云フ禹貢ニ曰兗州厥土白壤冀州厥土黑墳徐州厥土赤埴揚州厥土塗泥豫州厥土壤壤荷州厥土海濱廣斥ト是ナリ既ニ六工ノ中ニ剛柔虛實輕重廣薄アリ青黃赤白黑紫赭黎アリ且草木ノ化育各其土ニ應合不應合アリテ作物ノ豐凶種々甲乙ヲ分ツ其次第階級ヲ精密ニ辨別スルトキハ壤土墳土埴土各皆九等有リ塗泥壏土沙斥モ亦各皆七等ツヽ有リ此ヲ統テ四十八等ノ土性ト名ク諸作物土性ニ合不合ニ因テ各豐凶ノ損益ヲ奏スルヿ頗ル大ナリ故ニ植地ノ性ヲ明ニ辨シテ百性ヲ數辟シ土性ニ應合ノ草木ヲ作ラシムルハ禹稷躬稼シタル法ナルヘシ古法ノ世ニ明ラカナラサルヲ以テ祖父不昧軒翁憤ヲ發シ禹貢ヲ窓草シテ耕種ニ精微ヲ盡シ種々ノ土質ヲ細密ニ解剖シテ混合スル物品ヲ分テ此ヲ研究スルニ大地ノ土ト云フ者ハ大抵鐵ノ銹化タル者ニテ此ニ種々鹽油硫黃ノ酸氣ニテ諸金ヲ消化シタル物ヲ混シ或ハ硝石礬石硝子玉石ノ末モ和シタリ故ニ大地ノ土ヲ算フレハ土ト云フヘキモノ無キナリ又彼青黃赤白黑ヲ作スモ其色ヲ發スヘキ故アルヿヲ發明シ多年ノ工夫ヲ經テ天地ノ万物ヲ化育

スルノ機ヲ察シ遂ニ此書ヲ著ハセリ近來尚亦增訂ヲ加フ實ニ是勸農開物家ノ寶ナリ

○一隄防溝洫志四卷

此書ハ初メ獄庭霽甲州ニ遊ヒ異人ニ遇テ川普請水利ノ法ヲ傳ヘ受ケタル書五卷アリ其後先大人支明窩翁多年遊歷中諸國ニテ洪水ノ難アル土地ニテ隄防ヲ築キ滿溢シテ横流スルヲ防禦シタル川普請ノ善惡ヲ評シタルモノニテ種々ノ法ヲ增加セリ孟子說レタル如ク土地ハ人君第一ノ寶ナレヒ猛雨永ク降テ洪水横流スルトキハ上州廐橋ノ如ク城郭モ崩壞其外國々ニテ田園廬舍人馬モ皆悉ク流蕩シテ烏有トナルヿ往々アリ可不畏哉又水田水ノ手ノ自由ナラスメ此ニ灌クヿ無ケレバ旱魃作虐人民阻飢ス故ニ禹ハ川普請ニ從事メ外ニ八年骨ヲ折リ已カ門前ヲ三度通行セシカト家ニ入ラス隄防ヲ築キ且溝洫ノ普請ト溜池等ヲ作ルヿニ力ヲ盡サレタリ然レバ此業ヲ學ハスンハアルヘカラス此業ニ熟練スル即チ堯舜ノ道ヲ修ルナリ

一隄防溝洫圖解三卷

此書ハ種々水利ノ仕方ヲ論シ且ツ水刎諸道具ノ圖ト製法ヲ審ニセリ　公儀ノ御普請ニ水刎ヲ用ユルヿハ大聖牛ヨリ大ナルハ無シ然レヒ大聖牛ニテハ保ツヿ能ハサル場所頗ル多シ然レヒ　公儀普請ニ度々堤ヲ破決スルヲ厭ハサルニハ別ニ御趣意アルヿナルベシ筑後川ノ如キハ大聖牛ノ及フヘキ所ニ非ズ必ス八頭牛カ九頭牛ノ二重掛カ三重掛ヲ用ユルニ非サレハ保ツヿ能ハズ後々ニハ久留米ノ城モ崩壞スルヿ必セリ又上州廐橋モ城ノ既崩シタルノミナラス後ニハ彼城下數十町ノ町屋モ悉ク流蕩シテ石河原ト成ヘシ八頭牛ヲ用ユルヿヲ知ラザルヲ以テナリ其他此類諸國ニ尚多シ然レヒ八頭牛ハ雜形ニテ傳授スル者ナリ何トナレバ材木ノ數多ク圖ニテハ分明ナラズト知ルベシ

○一草木六部耕種法二十一卷

草木ノ六部トハ作物ノ根幹皮葉花實ノ六部ヲ云フ凡草木ヲ作ル者ハ必ズ求ル所アリテ作ル者ナリ或ハ根ヲ需ルカ皮ヲ需テ

作ルカ此六部ノ中ニ於テ專ラ需ル所アリテ作ルベシ然レハ其需ル所ノ部ニ因リテ其部ニ應合スル土性ヲモ撰ブベシ其地ヲ耕スモ植ルモ部ニ因テ同ジカラズ且ツ又糞委ヲ調合スルニモ其功能ノ根ニ淡テ肥大ニスル仕方アリ皮ヲ養フアリ葉ヲ繁榮スルアリ花ニ走リテ盛ニスル糞肥モアリ高ク上リテ實ヲ豐熟スル仕方モ有テ六部ノ作法各皆殊異ナル者ナリ農業ハ天功ヲ奪テ万物ヲ化育スル靈法ナレヒ草木ノ六部ヲ皆全ク十分成就スベキ作例アルヿナシ唯其需ル所ノ一部ヲ專ラニ充張セシムルヲ耕種法トスルナリ古來和漢ノ農書多シト雖モ未タ曾テ作物六部ヲ分テ其作法ニ精微ヲ盡セル者有ラサルナリ予多年農事ヲ淘煉シテ六部ヲ分タサルヘカラザルヲ發明セリ故ニ此書ヲ著シテ遍ク世ニ弘ム序例一卷總論一卷需根篇三卷需幹篇二卷需皮篇一卷需葉篇二卷需花篇二卷需實篇九卷都合二十一卷アリ皆是レ后稷ノ業ヲ學フ法ナリ

○一培養秘錄七卷

此書ハ先大人ノ病ニ臥シ給フニ及テ不可起ト覺悟ヲ極メ予ヲ召テ口授シタルヲ筆記セシ所ニメ家傳ノ糞肥ヲ配剤スル法ナリ七卷ノ中五卷ハ糞肥ニ用フヘキ品物ヲ詳ニ說キ二卷ハ糞培例ト名ク甲乙丙丁戊巳庚辛壬癸ノ十字號ニ分チ糞肥調合ノ法ヲ論セリ抑我家ニテ培養ニ用ユル品物ハ活物類十二種草木類十二種土石類十二種都合三十六種アリ此法ヲ用テ能製煉シテ貯ヘ其中ヲ或ハ二三種或ハ四五種ヲ配合シ種々ノ作物ニ培ヒ用テ恐外ノ豐熟ヲ得ルノ妙用アリ且又土用中ヨリ七月ニ至ルノ時ニ永雨或ハ霧霧濛々トシテ數十日ノ間日光ヲ見ルヿナク陰風吹襲キ非常ノ冷氣行ハルヽトキハ諸作物凋瘁黃萎シテ將ニ凶荒ニ至ラントス是時ニ當リ早ク心付テ丙字號中ナル大溫水灌漑水等ノ水糞ヲ以テ培養セハ大抵ハ荒凶ノ災ヲ免ルヘシ後レタリト雖モ五六分ハ救フヘシ故ニ培養法ハ糞小便ヲ攪回スル暇業ナレヒ造化ノ行屆カサルヲ補フヘキ妙用ノアル者ナリ易曰先天而天弗違後天而奉天時君子モ心ヲ盡サスンハアルヘカラス后稷ノ賢人ヲ以テ躬カラ其事ニハ精微ヲ盡サレタル趣ナリ

○一種樹秘要二卷

此ハ種々作物ノ苗ヲ仕立ル法ヲ說キ且接木及撓木ノ法ト壓條スル法ヲ說キ圖解ヲ出シテ詳カニ示セリ

以上七部書ハ本論ノ羽翼ニシテ本論ハ綱ノ如ク七部書ハ目ノ如キ者ナリ本論ヲ暗記シテ政ヲ行フト雖ヒ七部書ヲ講明シ子弟ヲ敎育シテ實業ヲ勉强セシメサレハ天意ヲ奉シテ化育ヲ贊クヘキ人材ヲ生セサルヲ以テ農政ニ善ヲ盡スコトヲ得ベカラス可不懋哉

○一種樹園法二卷附錄三卷

此ハ先年一諸侯ノ世子ニ早ク隱居ヲ勸タル時ニ獻シタル書ナリ其譯ハ世子ハ父君ノ甚愛シ給フ所ナレヒ御養子ニテ近來父君ニ御實子出來テ世子ノ順養子ト爲テ有カ故ナリ此種樹園法ニ說タル如ク江戸近邊下總上總房州相州伊豆等ノ國ニ於テ荒野原百五十町受地シテ此書ノ仕方ニ從ヒ此ヲ開キ法ノ如ク物産ヲ興スキハ後ニ一箇ノ紮封トナルヘシ百五十町ノ地ハ僅カ長十五町横十町ナリ下總ノ國千葉郡六本野ニテ二千町程ノ原野アリテ望ム者アラハ勝手次第ニ願ヒ出テ新田ヲ開クヘシト

公儀ヨリ御下知アリ相摸國鶴間野ニハ四五千町ノ野原有テ望ミ次第開發セヨト度々ノ御下知アレヒ今ニ此ヲ開クモノナシ其他二百町ヤ三百町ノ野ハ何レノ國ニモ甚タ多シ抑此書ニ說キタル如ク百五十町ノ荒野山ヲ法ノ如ク開クキハ最初ニ三年ノ間ニ入用金三千兩モ掛ルヘシ然レヒ年々作物ノ出ルヿ次第ニ多キニ因テ六七年ノ間ニ初メ仕入シタル三千金ハ悉ク皈リ其十五年目マテニ金ノ溜ルヿ二三万兩ニ及ヒ十六年目ヨリ年々七千兩ツヽ作得金ヲ生スルヿ以後永久ノ紮封ナリ此ヲ隱居料トシテ早ク家ヲ順養君ニ讓玉フヘシト勸メケレヒ世子予カ諫ニ從フヿ能ハス近邊ノ賈人此業ヲ上總ノ國ニテ始メ當年七八年ニ及ヒ葡萄ハカリモ四百兩出セリト云フ後ニハ頗ル大ニ富ヲ致スヘシ因テ此業ヲ諸侯ニ行ハシメンヿヲ欲シ附錄三卷ヲ作レリ

○一田畯年中行事三卷

昔后稷天下ヲ憂テ自ラ戎狄ノ間ニ竄ル不寧鞠陶ヲ生ム鞠陶公劉ヲ生ム公劉ヨク后稷ノ業ヲ修メテ自カラ戎狄ノ間ニ耕シ頗ル其家ヲ富セリ戎狄公劉ニ隨喜シテ服從スル者日ニ多シ於是乎始メテ豳地ヲ招キ還テ此ニ王タリ一族及家士其他下民ト雖ヒ農事ニ老練シ慈愛心ノ厚者ヲ撰テ數多ノ田畯ヲ置キ愈々農政ノ善ヲ盡シ新造ノ豳ヲ經營セシカハ國家隆盛一時ニ四邊ニ雄タリシヲ以テ近隣ノ諸侯歸降スル者十八國アリシト云如此富國强兵ノ大功ヲ成セシモ其本ヲ尋ルキハ悉皆數多ノ田畯ヲ民間ニ分宅セシメテ百姓ヲ敎化セシヨリ起リタルヿナリ豳詩ノ篇ヲ讀テ此ヲ證トスベシ故ニ土地ヲ領スル者ハ必ス后稷公劉ノ政ヲ學ヒ數多ノ田畯ヲ民間ニ置テ百姓ヲ敎育スヘキハ第一ノ要務ナリ此年中行事ハ田畯ノ勤方ヲ精ク說タル書ナルヲ以テ田畯ヲ置ントスルニハ先ツ其人物ヲ撰ンテ能ク其事ヲ學ハシメ而シテ後ニ此事ヲ命スベシ

一農政要略

一物産興起法

一開物新書

一勸農要錄

一十字號糞培例

一國土度數表

一漆園法律
一甲州傳水利法
○一開國新論
○一農政教戒
○一養蠶要記
○一致富小記
一貧民事業錄
一開物餘材集
一稻種名目帳
一司材要錄
○一農政學解嘲
○一草綿種子撰法

○一豳風古義精蘊
○一甘藷說

○一經濟要錄七卷

此ハ國ヲ富シ民ヲ安スルノ經濟ノ道ヲ論ス總論三章創業三章諸國風評九章開物五十二章富國九章都合七十六章ヲ既タル七卷ナリ○外ニ生統上篇九章合シテ二十一章ヲ記シタル書三卷アリ然レ𪜈此三卷ハ先祖以來ノ秘訣ニテ密傳ト定メ遍ク人ニ見セシムルヿヲ禁セリ

一經濟要錄補遺十五卷

此ハ開物五十二章ヲ增補シテ活物數及ヒ草木類土石類ノ物產ヲ生スルヿヲ審カニシテ其製秘ノ精微ヲ究タリ

一通移輕重法二卷
一開闔決塞論三卷

此二書ハ昔夏后氏ノ季ニ帝桀暴虐無道ニシテ放蕩ヲ縱ニシ下民ヨリ誅求シテ奢侈ヲ盡セシヲ以テ四海困窮セリ是時ニ當テ

伊尹成湯ヲ補佐シ土地ヲ經營シテ物産ヲ興シ輕重ヲ通移シテ開國決塞シ大ニ商國ヲ富シ終ニ夏桀ヲ追ヒ攜テ天下ノ民ヲ安ンセリ我祖父不昧軒翁伊尹カ功能ヲ眇式シ此法ヲ精究シ此政ヲ行フトキハ大ニ國ヲ富スヘキノ經濟法ト成セリ秘書ナリ他見ハ禁スヘシ

○一物價餘論三卷

此ハ先年松年越中侯ノ著シタル物價論ハ規模甚タ小ニメ世上ノ困窮ヲ救フニ足ラサルヲ以テ世上ヲ經濟スルノ法ヲ論セリ

以上五部ハ經濟ノ書ニテ國家ヲ豐饒ニシ百姓ヲ富贍スルノ法ナリ益稷篇禹曰懋遷有無化民亟民乃粒万邦作乂ト是レ經濟道ノ基原トス伊尹此ヲ用テ湯ヲ格皇天、傅說此ヲ行テ武丁ヲ隆盛ニス其後周室東遷シテ衰ヘタルトキニ管仲此法ヲ以テ齊桓公ヲ佐テ大ニ齊國ヲ富シ大功ヲ顯ハセリ孔子曰管仲相桓公九合諸侯一匡天下治不以兵車民到于今受其賜如其仁如其仁ト由是觀之則經濟法モ可貴者ナリ

一經濟總錄

○一物價餘論簽書

○一經濟問答及經濟問答秘記

○一復古法、復古法概言及復古法問答

一經濟大典

○一經濟提要

一榷貨法

○一濟民儲說

○一濟四海困窮書

○一防海策二卷

文化年中魯西亞國ノ賊舟我蝦夷國「エトロフ」島ノ內浦ニ寇シ戍卒ヲ逐ヒ哨堡ヲ燒ク次テ同島ノ舍那ニ寇シ戍兵ト戰ヒ御陣營並ニ府庫倉廩ヲ悉ク燒拂フ此ニ因テ牧田侯庄內侯仙臺侯會津侯兵ヲ蝦夷地ニ出シ海濱諸國騷然タリ時ニ予阿藩大夫梟堂氏ニ陪シ阿州ニ至リ德島府ニ滯留セリ此ヨリ前ニ魯亞西國ノ船阿州ノ海部湊ニ漂着シ船ヲ修復シテ去リシアリ故ニ外寇風聞起ルニ及テ土人復來ルアラントシテ頗ル此ヲ畏レ梟堂氏阿侯ノ命ヲ受ケ海岸ノ武備ヲ嚴ニス予カ西洋ノ事實ヲ知リタルヲ以テ其防禦ノ致方ヲ問フ故ニ此策ヲ作レリ

○一銕炮窮理論二卷

阿州ノ軍學者亜ニ火術家等皆紙ヲ用テ數多ノ大炮ヲ造ランヿヲ奏上セリ大夫予ニ此ヲ議ス故ニ予乃チ此書ヲ著メ鐵炮ノ得失ヲ論ス

○一三銃用法論

集堂大夫予カ論ヲ信用シ阿侯ニ奏シ德島府ノ南郊富田ノ二軒屋ト云フ所ニ鑄造役所ヲ作リ數多ノ大銃ヲ鑄造シ就テ三銃ノ用法ヲ予ニ攝練セシメリ

○一禦侮儲言四卷

此書ハ集堂大夫ト議セシ事多ク且阿州ニテ工夫調練シタル事モ多シ然レ𪜈予カ本邦諸兵家ニ水戰法ノ備ハラサルヲ憤テ少年ヨリ四海ヲ周歷シ陶練シタル𠃊多シ故ニ三島海賊ノ働キタル仕方ヲ取テ水戰舟軍ノ利害ヲ備究セリ伏テ今熟考フルニ諸尼利西ヲ始メ西洋諸國ノ廣大堅固ナル軍船ト討戰スルニハ此書ニ精ク記載シタル予カ工夫ノ自走火船ヲ第一トスヘシ

○一兵法一家言十二卷

伯益曰都帝能廣迎乃至乃神乃武乃文ト又孔子治國ノ要ヲ論シテ曰足食足兵ト武備ハ國家ノ大事ナルニ論ナシ故ニ我家兵學マテヲ講セリ然レ𪜈日本ハ武國ナルヲ以テ諸兵家甚多ク武事ニハ不足ノナキ趣ナリ故ニ予ハ己カ欲スル事ノミヲ筆記シテ此書ヲ綴リ成セリ或ハ他ノ兵家者流ノ忌嫌フ仁モ有ヘシ其名ヲ一家言ト題セシモ世上ノ人ノ用ルト不用ニハ絶テ拘ルヿナキノ意ナリ首篇第一ハ撫御第二ハ一騎前第三ハ人數組第四ハ繰練第五ハ大炮繰練第六備押シ第七ハ小荷駄押第八ハ物見第九ハ陣營第十接戰上第十一接戰下第十二ハ攻城上第十三ハ攻城下第十四籠城上第十五籠城下此ヲ十二卷トス

以上五部ハ兵學ノ書ナリ

○一東西火攻辨及附錄

○一提硝新論

○一火箭製作法

○一火攻新書

○一火術秘法錄

○一大衍流傳書

○一火攻深秘錄

○一作焔硝製造方

○一水戰要錄及秘決

一車戰要錄

一水戰新論

○一隊轉戰法
○一彈藥後裝法秘決
○一新製小艇放大銃論
○一鐵砲鉛彈徑定率法
○一鐵砲製作寸尺法
一籌海新書
○一呑海肇基論
○一宇内混同秘策
○一存華挫狄論
○一水陸戰法錄
○一自走火船法
○一大銃車戰法

一律令合璧二十卷

此ハ大禹謨召刑ヲ始トシテ魏文公ノ師里埋ナル者カ古代ノ典刑ト諸國ノ降制トヲ集合シ其要樞ヲ採摘シ法經六篇ヲ作リシヨリ以來和漢歷代ノ律令格式ノ制度少ク損益アリト雖モ人君人ヲ治ルノ天條ハ此ニ外ナラズ總テ國家ノ法律ハ皐陶謨ニ載記スル所ノ天討有罪典刑ナレハ至仁ノ君ト雖モ赦スヿ能ハサル所ニシテ執政ハ天ニ代テ天罰ヲ行フ大事ナルカ故ナリ凡ソ天地ノ大經ハ善ヲ積ム者ニハ必ス此ニ慶ヲ賜リ惡ヲ積者ニハ必ス殃ヲ降ス若夫善ヲ積テ現世ニ慶ノ無キ者ハ必ス來世ニ餘慶アリ惡ヲ積テ現世ニ殃ノナキ者ハ必ス來世ニ餘殃アリ是天道草昧ヨリノ定憲ナルヿヲ知ヘシ然レハ此律令ハ以後万世ニ亘リテ人ヲ治ルノ法ナルヲ以テ罪ノ輕重ヲ糾スヿ精密ヲ究極セスンハアルヘカラス故ニ古代ヨリ十惡ヲ糾明シ八議ヲ論辨シタル且戒ヲ輯テ此ヲ律令合璧ト名ケ以テ勘定ノ糾按ニ備フルナリ

○一協中錄五卷

此ハ即チ當今ノ法律ニシテ且近來松平越中侯執政中諸卒行ト會議シ法經ニ精微ヲ盡シ撰述等アリキ其他歷代ノ刑法ヲ校合シテ此ヲ左右シタル書ナリ古典ニハ刑ハ無刑ニ期ス言フト雖モ輕キノミ從フヒハ却テ刑人ノ多ク出來ル基ト爲ルヿナリ今此澆季ノ世ニ當テ懶惰怠慢ナル者ヲ嚴ク罰スルニ非サレハ開物勸農ヲ勤メテ勵ムヿ能ハス國家ヲ富シ百性ヲ豐ニスル學ヲ勸メテ非教ニ從ハサル者ヲ呵嗔セサレハ興國ノ業ニ骨ヲ折ル者アルヿナク國ハ漸々衰微シテ百姓ハ次第ニ困窮スヘシ故ニ

天功ヲ亮クルノ實業ヲ勉強スル者ヲハ速ニ賞奬シテ此ヲ登庸シ怠惰ニテ實業ヲ勸メサル者ヲハ殿ク呵嗟シテ此ヲ黜クヘシ如此スルトキハ士民皆中ニ協フナリ

以上二部ハ刑法ノ書ニテ古ノ皐陶カ事業ノ支流ナリ

一五倫講義抄十卷

此ハ天ヨリ生民ヲ降ストキハ人々皆各仁義禮智ノ性ヲ賦與シ賜ル者ニテ即チ此ノ性ト云ハ人ノ人タルノ規則ナリ故ニ此ノ四性ノ無キ者ハ人ニ非スメ禽獸ノ類ナリ然レトモ或ハ流俗ノ惡風ニ染リ或ハ私欲ニ溺ルヽトキハ己カ本心ヲ放チテ天ヨリ賦リ與ヘ給タル性ヲ失テ人ノ人タル規則ヲ敗リ人面獸心ノ惡物ト成ル故ニ上下ノ神祇震怒ヲ作シ必ス天罰ヲ下ス可不畏哉故ニ此五倫ノ道ヲ識明シ人々ナシテ天理ヲ自得セシメ自ラ其心ヲ有シ其性ヲ養テ天ニ事フルヿヲ教訓スルノ書ナリ曾祖父元慶翁此ヲ著セリ

一邇譬訓解十卷

此ハ五倫講義抄ノ餘論ニテ祖父不味軒翁ノ所ナリ

○一濟民瑣言二卷

此ハ予先年九鬼侯ノ聘ニ就テ丹州綾部ニ至リ綾部領ヲ悉ク回村シテ百姓ヲ存撫セシ時ニ勸農教喻ノ官人安樂島孫六ト云ヘル家士ニ語リタル百姓教喻ノ事件ヲ予カ小子祐三ナル者從テ丹州ニ行キ傍ニ在テ竊ニ年記セシ所ナリ

以上三部ハ教化ノ書ナルヲ以テ古契カ人民ヲ教ヘタル支流ナリ

○一神字日文考

上古世ニハ皇國ニ神世ヨリ文字アリシヲ厩戸皇子世ヲ漢風ニ爲サンヿヲ欲シ神學ノ通用ヲ殿シク禁シ日文ヲ悉ク絶滅シ玉ヘリ然レトモ日本紀ノ敢ト思部ノ正道カ神道カ缺ニ云タル如ク神世ヨリ有來リシ日文字ヲ刊シ悉ク漢字ヲ塡充シケル、夫神ノ製作タル日文ヲ皆絶棄ヿヲ可惜トヤ思召玉ヒケレ人ニモ書セシメ親モ書玉ヒ古キ神社又ハ佛寺ニモ遺シ納メ置玉タルヲ敕封ナトヽ冒ヒ偽ヘタル者アリ然ルニ我カ曾祖父元慶翁勸農開物ノ學ヲ修メ旁ラ皇國上代ノ古實ヲ審ニスルヿヲ好ムノ癖アリテ四海ヲ遊歷スルヿ四十年足迹天下ニ遍シ往々諸國神社古寺ニ傳來スル所ノ神代文字ナリト稱スル異形ノ文字ヲ寫シ集メタルヿ都合十枚アリ其後予神道方吉川家門人ト爲ルニ及テ社兄曾津侯ノ神道方大竹喜三郎政文ヨリ對馬ノ國ト部岡比留氏ニ古來所傳ノ神代文字三枚ヲ傳受ケタリ予是ヲ以テ日文ノ始末ヲ詳ニセリ因テ熟按スルニ此文字ノ昨多年次々ニ寫シ誤リタル者ナルヘケレトモ中ニハ勢ヒ雲烟ノ如ク自然ニ優美ノ樣アリテ後世好事家等ノ決テ書出シタル者ニ非サルヿヲ察シ竊ニ此ヲ貴重シテ此巻ヲ編ヿヲ從事セリ

○一鎔造化育論三卷

予西洋諸國天文曆數術ノ精妙ナルニ感嘆シ東洋諸國ノ及フヘキ所ニ非サルヿヲ知ル然レ𪜈西洋能ク天地諸星運動ノ數理ヲ精究スト雖モ其運動ノ起タル基原ヲ知サレハ未タ其善ヲ盡セリト云ヘカラサルナリ予先年皇國ノ古事記ヲ讀テ伊弉諾神若海原ヲ盤鳴給ト云フニ至リ竊ニ醒悟セシヿ有リ本居宣長曰盤鳴トハ猶攪回スト云フカ如シト然ハ則地動ハ伊弉諾ノ神攪キ回シ給ヒタル運動ナリ地動ナルヿ論スルニ及ハス因テ產靈之元運ニ四定例アルヿヲ發明シ天地鎔造ノ神機ヲ論シ西洋ノ未タ屆カサル所ヲ說ケリ既ニ天地運動ノ理發明メ次テ万物化育ノ玄理ヲ發明セリ乃チ此書ヲ作テ窮理ノ提要トナス抑天造草昧ニ高皇產靈ノ大神黎民ヲ化育シ此ヲ蕃息給ハンヿヲ思召大慈德ニ賴リテ靈氣大虛ノ中央ニ蘊湊リ渾沌トシテ不可名狀ノ物ヲ生ン曾ヘハ海上浮雲ノ根係ル所ノナキカ如シ太神瓊戈ヲ其物ニ指下シテ此ヲ攪回シ西ヨリ東ニ渦カ如ク旋回給フケレハ其運動ノ妙機ニテ所混ノ重濁汚穢泌別分散万道ニ飛起リ霧雨沛トシ雹ノ降カ如ク脫出シテ遠方ニ至リ悉ク星ト爲リ其精粹ノミ中央ニ凝定リ日輪以テ成就スルヿヲ得タリ而其重濁汚穢ノ最初第一ニ脫出タルハ彗毋星次ニ衆星次ニ土星次ニ水星次ニ火星次ニ大地次ニ金星次ニ木星ナリ彗毋星ハ其質最重濁故ニ最初ニ脫出テ日輪ヲ距ルヿ絕遠ニ止リ水星ハ其質最輕清故ニ最末ニ分レテ日輪ノ至近ニ在リ其他諸星モ亦各輕重清濁ニ從ヒ分出に早晚アリ故ニ其日輪ヲ距ルモ箇々不同ニメ運動モ亦皆各異ナリ然レ𪜈大神ノ攪回給ヒタル神機ニ從テ西ヨリ東ニ運リ盤古悠久休怠アルヿナキハ同シキノミ予既ニ此天造ノ理ヲ發明シテ此運動ヲ產靈之元運ト名又按スルニ產靈元運ニ四ノ定例アリ此レ亦永久不易ノ天紀ニメ歷算ノ根元ナリ所謂四定例ハ其一ヲ旋回ト云フ凡ソ分生シタル者ハ皆本物ヲ中心トシテ必ス其外圍ヲ旋回ス其二ヲ運動ト曰フ凡分生スル者必ス其本物ノ外圍ヲ西ヨリ東ニ運動ス其三ヲ運速ト曰フ凡分生メ其本物ニ近キ者ハ其行フヿ速ニメ本物ニ遠キ者ハ其行クヿ運シ其四ヲ形体ト曰フ凡分生スル者ハ必ス本物ノ正体ニ肖ル此ヲ天　ノ定例トス而其重濁汚穢悉ク泌別シ盡テ日輪既ニ凝生スルニ及テ彼瓊矛旋回ノ正中ニ衝取テ天中ノ柱トナス故ニ天柱ハ南北二極ニ串貫テ宇內運動ノ樞軸ナリ万星ハ最初遠

テ是日輪ヨリ分出シタル者ナリ故ニ皆日輪ヲ中心トメ終古ニ其外圍ヲ西ヨリ東ニ旋回シ以テ產靈ノ元運ニ從フ元運ノ旋回ハ頗速者ナリ然ニ此日輪ヲ離ルノ遠キニ至テハ動クヿナキカ如シ此亦元運ノ定例ナリ日輪ハ最初大神ノ攪回シ給ヒタル所ニシテ群動ノ基元ナリ故ニ日輪自己旋轉ハ大約二十五日半餘ニ一回ス是ニ由テ此ヲ觀レハ諸方星ノ運動ハ皆是レ日輪ノ餘勢ニ牽聯ノ旋ル者ニテ万物ヲ化育スルニハ不可不然天造ノ妙機ナリ水星ハ日輪ノ位ニ最近シ故ニ其運回頗ル速ク八十七日半許ニ日輪ノ外圍ヲ一周ス金星ハ二百二十四日餘ニ一周ス此星ノ側ニハ一個ノ小星アリテ恒ニ此星ノ外圍西ヨリ東ニ旋ル此ハ金星ノ分星ナル故ニ產靈元運ノ定例ニ從フナリ大地ハ三百六十五日三時弱ニ一周ス大地ニハ元運ノ外別ニ自轉ノ旋回アリテ必ス十二時ニ一回シ日ニ向タル半面ハ晝ヲ作シ日ニ背キタル半面ハ夜ヲ作シ以テ大地ノ晝夜ヲ分ツ是伊弉諾大神ノ皇祖產靈ノ大神ヨリ勅命ヲ受ケ陰陽晦明起自心動靜皆各其適宜ヲ得テ万物ヲ化育シ亟民ヲ大ニ滋息センヿノ思召テ若海原ヲ攪回シ國土ヲ修理固成給ヒタル旋動ナルヲ以テ予此ヲ伊弉諾ノ元運ト名ク故ニ大地ハ恒ニ私運三百六十五日二分半弱ニ日輪ノ外圍ヲ一周ス此ヲ大地ノ一年ト云フ又此大地ニモ分生シタル一個ノ星アリテ恒ニ外圍ヲ旋回ス此ヲ月輪ト名ク日輪ハ二十七日餘ニ大地ヲ一周ス然レ𪜈日輪ト合伏スルハ二十九日半許リナリ此ヲ一月ト曰フ火星ハ六百八十六日餘ニテ一周シ木星ハ大約十二年許ニ一周ス此星ニハ分生ノ小星四箇有テ西ヨリ東ニ外圍ヲ旋リ木星ニ近キハ其運ニ速ニ遠キハ遠キニ從ヒ漸々遲ク以テ元運ノ定例ニ從フ土星ハ三十年許ニ一周ス此星ニハ環ノ如キ者アリテ本星ヲ圍繞ス且ツ分星ノ小星五箇アリテ木星ノ外圍旋ルヿ木星ノ小星ニ說キタルカ如シ彗星二十八宿等ハ日輪ヲ距ルヿ甚タ遠キ故ニ二万五千九百二十年許ニ一周ス諸星ハ自己ノ光ノナキ者ナリ然ルニ光曜ヲ作スヿハ皆是日輪ノ遍照ヲ受テ光リヲ發ス彗毋星ハ其質甚重濁ナルヲ以テ諸星ノ最初ニ脫出テ至遠至遠日光ノ屆クヿ能ハサル幽暗冥々タル所ニ止リテ光曜ノナキヲ以テ淺星アルヤモ不可知且何レノ所ニ纏スルモ亦絕テ不可知ナリ唯其分星シタル彗星ナル者ハ產靈元運ノ定例ニ從ヒ其毋星ノ外圍ヲ運回シテ大地ノ近所マテ來ルヿ有リ近ク來リタル時ハ見ルヘク遠ク去レハ不可見也蓋彗星行環ノ一方ト日輪ト水星行環ノ間ニ起リ又其一

方ハ金星ノ行環大地行環及ヒ火星水星土星衆星等ノ行環ヲ悉ク截通シ査花シ迷暗ナル冥際ニ入レリ故ニ其一周スル年月日時ヲ測量スルヿヲ得ヘカラス星ニ小大アリト雖モ其星數ノ幾個アル者ナルカモ不可知且又其出沒ノ期限モ亦預測ルヘカラス唯其收縮ヲ察スルニ此星ノ質極メテ濕氣多キ者ト見エテ日々近ク寄ルニ從ヒ日輪ノ熾炎ニ敲炙セラレテ夥シキ蒸氣ヲ發シ直視スレハ芒ノ如ク横見スレハ尾ノ如ク成ハ長クノ帚ノ如シ故ニ孛星彗星長星等ノ諸名アリ近頃間西洋人此ノ數ト理トヲ精究シテ出沒ノ曆法マテヲ作レリト恐クハ杜撰ノ忘想冥測ナルヘシ何トナレハ西洋人ハ產靈ノ元逝ノ四定例アルノ神理ニ通セス故ニ未タ彗ニ星アルノ意義ヲ審ニセスノ唯其分生シタル子星ノミニ就テ靈空スルヲ以テナリ故ニ予ハ信用セサルナリ此書ニ出シタル諸曜行環圖ヲ視テ信ノ天理ニ熟察スヘシ又西洋人曰大虛中羅列スル所ノ衆星ハ皆各々一個ノ日輪ニシテ此ニ土木火金水及ヒ地球等ノ六曜モ全備シ此世界ト異ナルヿナシト此モ亦靈空極メテ甚キ論ナリ如此僻說ヲ發スルモ西洋人ハ產靈元逝ノ神理ヲ知ラサル故ナリ衆星モ恒ニ日輪ノ外圍ヲ西ヨリ東ニ通周シ二万五千九百二十年ニ一周ニ元逝ノ定例ニ從フヲ見レハ日輪ヨリ分出シタル物タルノ證ハ明白ナリ此等ノ事ニ就テモ古事記ノ尊崇スヘキ神書ナルヿヲ知ルヘシ蓋シ以ルニ五星ハ大地ノ如ク國土アリテ人類モ居ルヿナルヘシ日輪ハ位ヲ六合ノ區中ニ定テ赫々タル光耀ヲ發シ遍ク宇内ノ爲世界ヲ照シ其光ナスノ揚熱ヲ以テ大地ノ水土ヲ照溫メ万物ヲ豐饒ニシ亟民ヲ養ヒテ蕃息給ンヿヲ思召ス大恩ノ篤キヿ言語文辭ノ盡スヘキ所ニアラス故報之德洪大强ナシ故ニ先ツ此書ヲ讀テ天恩ヲ欣戴シ且又古聖舜ノ日天ヲ敬ヒ天意ヲ奉リ天巧ヲ竟テ農ヲ勸メ物ヲ開キ食物衣類ヲ豐カニシテ民ヲ養タル政事ヲ熟察スヘシ

○一天柱記

一地柱記

一鎔造化育論衍義

一坤元錄

一天刑要錄

○一山相秘錄二卷及圖解

金銀銅錫鉛永林砂朋玉寶石等ヲ出ス諸山ノ相ヲ論シ且ツ此ヲ採リ出スヘキ仕方ヲモ說キ諸金及ヒ鐵等ノ製煉ヲ辨セリ

一山物論十五卷

此書ハ硫黃硝石明礬綠礬胆礬石炭砥石硯石板石卷石浮石紅砒桑石水晶瑪瑙空青琢青白堊藥石丹青等ヲ出シ又諸藥物禽獸其他種々鑪材薪炭等マテ數多ノ物產ヲ興ス仕方ヲ論ス

一海產論五卷

鮮魚薩魚鮑虫魚杉貝類海苔類藻類其外海鹽ヲ燒キ出シ且ツ芒硝凝水石及ヒ「マクチシア」等ヲ採リ尙又數多ノ海船ヲ造テ運漕ヲ働ク事ヲ記ス

一牧牛馬法一卷

此書ハ野ニ牧ヲ取立テ牛馬ヲ收ムルノ法ナリ且白家黑家ヲ多ク個テ食物ヲ豐カニス

○一漁村維持法二卷

漁民ハ其性質放埒ナル者ニテ物ヲ貯フルヿヲ知ラズ大漁アルトキハ其志以ノ外ニ大氣ニ爲テ錢ヲ遣フヿ流ルヽカ如ク酒ヲ飲ムヿ鯨ノ潮ヲ吸フカ如シ今日ヲ知テ明日ヲ知ラズ故ニ凶荒穀物ノ貴キ年ニ海潮變リテ永ク不獲ノ繼クヿ有レハ比屋皆餓死シテ或ハ一鄉人烟ノ絕ルニ至ルヿアリ大ニ農民トハ趣ノ違タル者ニテ可愍ノ次第ナリ故ニ漁村ノ領主ヨリ此ヲ維持シ上ヨリ官人ヲ立テ教化ヲ加ヘ法度ヲ定メ大漁ノ時ニハ積物ヲ貯ヘ以テ凶荒疫病不獵等ノ手當ニ備フヘシ納ツ又種々海ヨリ生スル物産ヲ出スノ法ヲ敎テ女兒ト雖モ閑暇ニ日月ヲ送ラシムルヿ無カラシメ以テ海濱ノ村々ヲ富實ニセシムヘシ

此書ハ先考玄明窩翁多年四海ヲ遊歷シ凶年及ヒ不漁ノ時漁村ノ民ノ多ク飢餓ニ斃ルヲ觀テ此ヲ悲ミ救ハンヿヲ欲シテ著セリ

以上五部ノ書ハ山海ヲ經營シ種々物産ヲ出シテ國家ヲ豐ニシ百姓ヲ富スルノ法ナルヲ以テ乃チ伯益カ事業ノ餘裔ナリ

一坑場法律

一山民産業錄

一五金開發論

一弊政改革記

○一責難錄

○一丹波巡察記

○一鳥羽經緯記

○一紀藩經緯記

○一薩藩經緯記

○一日向經緯記

○一論筑後河水害

○一上疋田大夫封事

一垂統法話

○一垂統泉源法

○一垂統秘錄
○一西洋列國史
○一西洋藥物考
○一四海遊歷記
○一內洋經緯論及開作圖
○一石版製法
○一洋紅製法
○一寫眞鏡製法
一環海彙聞
○一硝石製造辨
○一椿園秘記
一製煉秘錄

○一佐藤家々譜
附言右ノ外翁ノ書柬詩稿漫錄等引用セシ者アレ𪜈略之

佐藤椿園家傳書目錄 終

著者此傳を記するに當り學友高橋午山小杉天外二君の助言を得たり乍
卷末茲に謹んで之を謝す

穆山識

明治廿六年九月十五日印刷
明治廿六年九月十八日發行

定價金五十錢

著者兼發行者　飯村粹　秋田縣仙北郡六鄉町五十一番地
印刷人　根岸高光　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地
印刷所　秀英舍工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地（電話十九番）
發賣所　敬業社　東京市神田區裏神保町一番地

版權所有

006864-000-2

289.1-Sa848Is

佐藤信淵翁伝

飯村　粋／著

M26

ACK-0603